

幼い子どもにせがまれて、何度もうくり返すおはなしには、子どもの成長にとつて大切な要素がふくまれていることを、後になって発見することがある。先日亡くなった上沢謙二氏の『新幼児ばなし三百六十五日』（恒星社厚生閣）の中の「赤い赤ちゃん牛」もそのひとつである。早おきのにわとりさんは、けさも一ばん早くおきて、みんなを起しました。「お日さま出たよ。天気はよいよ。モーさんおめでとう、赤い赤ちゃん生まれたよ」そうすると猫がいう。「お母さんに似て赤いね、いい赤ちゃんだ。」犬がいう「やわらかくて赤いね。」馬がいう「しっかりして赤いね、いい赤ちゃんだ。」ここまで話すと、寢床の中で聞いていた子どもたちは一斉にいう。「あたしの生れたときはどうだった？」「あなたが生れたときは、やわらかい髪の毛が薄くて上品だった」「あたしはどうだった？」「あなたは真黒な髪の毛がふさふさしていた」「それで

お父さん何ていった？」「元気で立派だなんて」「ワハハハハ」自分の赤ちゃんのおきのはなしは、何度くり返してもあきない。中学生になっても、高校生になっても、同じ会話をくり返す。覚えてはいない自らの出発点における、親との信頼をたしかめているかのようである。赤ちゃんのはなしはもつとつづく。毎日、朝出かけて、夕方には帰ってくるお母さん牛が、ある日、夜になっても帰らない。猫も、犬も、馬も、皆が心配して慰める。泣きながら一晩を過すが、翌朝になるとお母さんが戻ってくる。そうして赤い舌を出して、べろりべろりと赤ちゃん牛をなめる。お母さん牛が帰ってこないところは、ふとんの中にもぐりこんで聞いていた子どもも、最後のところにくると、顔を出してにっこり笑う。揺がない信頼をもう一度確かめているかのようである。幼い子どもにおはなしをするのは本当に楽しい。

(津守)

幼児の教育 第七十七卷第十一号

十一月号 ◎ 定価二二〇円

昭和五十三年十月二十五日 印刷  
昭和五十三年十一月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館 にお願いたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

Printed in Japan